

史跡山形城跡における植生景観について

Vegetation Landscape of the Historic Site Yamagata Castle

山本 翔太 YAMAMOTO Syota

要 旨

近年では全国各地の城跡で史跡整備が進められ保存活用計画が作成されているが、城内に生育する樹木に関心が払われることは少なく、史跡における価値が認知されずに遺構の顕在化や修景などを理由に伐採されてしまうことがある。近世において城内に生育する樹木は建築材や食料となるだけでなく、土塁上の樹木については城外からの視界を遮る防備的な役割を果たし、また地中に下ろした根で土塁の崩壊を防ぐといった城郭の構成要素として様々な機能を有していたことが指摘されている(吉田2014・2018)。史跡整備においては史跡を構成する要素の歴史的な価値や位置づけを明確にすることが重要であり、これら城跡の樹木に焦点を当てた研究は今後の城跡における整備及び保存活用の取り組みに示唆を与えている。

本稿では史跡山形城跡における近世から近代までの植生景観の変遷を踏まえ、現状の植生景観に対する歴史的な位置づけ及び価値づけを再確認した。対象として扱った資料はおもに文献史料、絵図や古写真などの画像史料である。その結果として、霞城公園二の丸土塁及び十日町の三の丸土塁にみられる現状の植生景観は植生を構成する樹種や歴史的な景観の変遷より、近世から近代までの植生景観との連続性や関連性が認められることを指摘した。

キーワード: 史跡整備 山形城跡 植生景観

1. はじめに

山形城は南北朝時代の延文元年(1356)に入部した斯波兼頼が築城したのが始まりとされる。近世には最上義光の普請によって拡張がなされ、さらに鳥居忠政による大規模改修が行われたと伝えられる。明治初年になると山形城は新政府によって接収され、山形県の所管となるが、城内の建物・石垣・樹木等が払い下げられ破却が進んだ。明治23年(1890)には旧藩主である水野氏に払下げられ、さらに転売されて城内は農耕地あるいは薪伐地として利用される。明治29年(1896)には日清戦争後の軍備拡張に伴って、城跡が歩兵第三十二連隊の設置のため国に寄与されるが、それに伴い本丸土塁の破却や石垣の埋め立てが行われた。第二次大戦後の昭和23年(1948)には山形市が無償で払下げを受け、都市公園法による「霞城公園」として市民へ解放される。昭和61年(1986)に国の史跡に指定された後は、発掘調査や復元整備が計画的に進められた。現時点で二ノ丸大手門や本丸一文字門の石垣が復元されている。

2. 研究の目的・方法

昭和59年(1984)に作成された『霞城公園整備計画書』によれば、霞城公園の整備計画を進めていく上で「山形市の中心的な都市公園」「市民要望の強い静的な空間」「山形城跡として、歴史を伝える文化財(史跡)」といった基本方針が設定されている。さらに植栽計画については「花の多い公園」「四季の花のあふれる公園」を目指すことに加えて、建材用や城に関わる有用木を主として植栽するとしている。

平成24年(2012)に発行された『山形城跡保存管理計画』を参照すると、史跡の構成要素は「本質的価値を構成する諸要素」と「本質的価値を構成する諸要素以外の諸要素」に分類され、前者には二の丸四方の門の石垣、二ノ丸土塁と堀、三ノ丸土塁など、後者には二ノ丸東大手門、本丸土塁、公園利用者駐車場などが該当する。植生については、市指定天然記念物である霞城の桜(エドヒガンザクラ)、義光時代に植樹されたとされるイチイの古木、サイカチ古木、エゾエノキ古木が近世から生育していた可能性のある樹木として「本質

的価値を構成する諸要素以外の諸要素」に含まれている。これらは近代の植栽を踏襲するサクラも含めて、積極的な保護育成を図るとしており、遺構の保存や顕在化に影響を及ぼすものや急傾斜地に生育する危険な樹木については適切な管理を行うとしている。十日町三ノ丸土塁跡に生育するケヤキを主体とする植生については、いずれの構成要素にも含まれておらず、景観木もしくは市内の数少ない緑地として有効であるとし、遺構に悪影響を及ぼす場合や幹や枝が枯損した際は枝おろしや伐採を行っていくとしている。

問題の所在として、サイカチやエゾエノキの巨木、そして近代の植栽を踏襲するサクラについては歴史性のある樹木として積極的な保護育成を図るとしているが、霞城公園二ノ丸土塁や十日町三ノ丸土塁跡において、現状の植生景観を主体となって構成しているケヤキ・エノキ・スギなどについては史跡の構成要素のいずれにも含まれず、整備計画でも言及されていないため、史跡山形城跡における価値づけ及び位置づけも曖昧である。

東方地方における城跡の史跡整備の取り組みについて、史跡仙台城跡では天然記念物青葉山が本質的価値を構成する諸要素に、その他の樹木が本質的価値を構成する要素以外の諸要素に設定されている。史跡棚倉城跡では史跡指定地外の県指定天然記念物「棚倉城跡の大ケヤキ」が本質的価値を構成する要素に、植栽木・樹木が本質的価値を構成する要素以外の諸要素に設定されている。これら史跡の構成要素として重要とみなされない樹木は遺構の保存及び顕在化のための修景によって伐採されてしまう場合がある。城跡における保存・活用・整備では樹木等が重要な構成要素としてみなされることが少ないためである。近年では城郭に伴う樹木の存在意義について、その役割を再認識するための研究が進められており、城郭の視界を遮断するための防備や土手を強固にするために、樹木が城郭の建造物の一つとして重要な役割を果たしていたことが指摘されている(吉田2014・2018)。また史跡の整備において構成要素に含まれる植栽についても複雑な問題点が議論されている(内田2020)。歴史性を十分に活かした史跡整備においては、過去から現在までどういった経緯によって植生景観が形成されてきたかを様々な史料から把握し、現状の植生景観の史跡における価値づけ及び位置づけを明確にしていく必要がある。

本稿の目的は、史跡山形城跡における近世から近代までの植生の様相及び変遷を明らかにすることで、整備計画に



図1 霞城公園二ノ丸土塁の植生景観(南側)



図2 霞城公園二ノ丸土塁の植生景観(北側)

において構成要素に含まれない現状の景観が歴史的な価値を秘めている可能性を指摘することである。さらに現状の植生景観の歴史的な価値及び位置づけを明確にしたい。それにより史跡山形城跡における歴史性を活かした樹木管理を実現するための参考になると考える。

研究の方法として、まず史跡山形城跡にあたる霞城公園二ノ丸土塁上に生育する樹木の樹種ごとの本数及び分布を確認することで現状の植生景観を把握する。十日町三ノ丸土塁跡については筆者が現地を観察して現状の植生景観を把握した。そして山形城における近世から近代までの植生景観の変遷を文献史料及び絵画や古写真といった画像史料をもとに確認していき、霞城公園二ノ丸土塁や十日町三ノ丸土塁跡にみられる現状の植生景観との連続性や関連性について検討する。

3-1. 現状の植生景観

現在、山形市では霞城公園二ノ丸土塁上に植栽されているサクラの保存管理計画を作成するための必要な情報を

集積することを目的として、サクラの分布図及びサクラ診断カルテの作成が進められている。しかし、スギやケヤキといったサクラ以外の樹木については手が付けられていない。そこで霞城公園二ノ丸土塁上に生育するサクラ以外の樹木の分布及び現状の植生景観を構成する主要な樹種を把握するため、現状植生の調査を行い、二ノ丸土塁上におけるサクラを除いた樹木分布図を作成した(図4)。図面上における各樹木の位置関係は、山形市まちづくり政策部公園緑地課が発注し、株式会社ザオー測量設計が受注して行った「霞城公園二ノ丸土塁整備に伴う樹木位置等測量委託」による計測結果を用いている。調査結果としてケヤキやエノキ、サイカチ、オニグルミといった広葉樹、そしてスギやモミ、マツ類といった針葉樹が土塁上に生育していることが確認された。

現在の霞城公園二ノ丸土塁上に生育している樹木について、サクラを除いて、今回の調査で記録したものは総計262本であり、樹種別に本数が多いものに、ウメが52本、ケヤキが49本、スギが46本、エノキ・エゾエノキが32本、マツ類が28本、その他55本である。また本数は少ないが、大木としてサイカチやモミが生育している。さらに分布図より、土塁の南及び南西側の斜面にケヤキが、北及び北東側の斜面にスギが集中して生育していることが確認できる。一方で、北東寄りに巨木が多くみられるサイカチについては、往時は裏鬼門にあたる南西隅にも生育していたことが確認でき、棘の生える特徴が鬼門の信仰と結びつきやすいことから人為的に植栽された可能性がある。エノキ・エゾエノキは土塁上に広範囲に分布しており、この他に土塁上にはサクラが約800本生育している。

以上の調査結果から、現在の霞城公園二ノ丸土塁ではサクラ及びウメを除いて、約200本の樹木が生育していることが確認できた。とりわけ本数の多い樹種として針葉樹のスギ、広葉樹のケヤキとエノキが挙げられるが、スギとケヤキはそれぞれ土塁上で偏った分布を示しており、南側ではサクラに交えてケヤキやエノキの広葉樹が主体となって構成される植生景観、北側ではサイカチやエノキの巨木にスギを多く交える植生景観が形成されている。

十日町に残存する三ノ丸土塁跡では多くのケヤキの大木を中心にしてエノキとスギを交えている。エノキとスギは数本ほどしかなく、本数は圧倒的にケヤキが多くを占めており、広葉樹が主体を成した植生景観を形成している。



図3 十日町三ノ丸土塁跡の植生景観

3-2. 近世の植生景観

三ノ丸を含めた近世の山形城内の植生景観について、日記や藩史料などの文献史料や版画といった画像史料から読み取ることができるが、詳細な樹種が記された資料は少ない。『年寄部屋日記書抜』の享保16年(1731)の記事には、三ノ丸内生嶋市之進屋敷に生育するサイカチの枝を伐採したことが記されている。しかし屋敷地の詳細な位置については不明である。数多くの樹種が記された貴重な資料として、明和3年(1766)の『出羽国旧事略記』が挙げられる。山形城では幕府の直領であった明和元年から同4年の間に二ノ丸及び三ノ丸内の武家屋敷の大半が取り払われ、跡地が田畑に変えられた。その際に幕府代官が町在に入札を公布した際の対象物の樹種名と数量の詳細な記録が記されており、当時の三ノ丸内に生育していた樹木について知ることができる。それによれば、漆木や栗、柿といった栽培種を始め、スギやヒノキ、モミなどの有用な針葉樹が三ノ丸内に多数生育していたことがわかる。また雑木とは別にして「槻」が1本記録されている。ここには具体的な「槻」の大きさも記録されており、目通り壺丈五尺廻りである。これは目通りの幹周囲が約4.5mの大木であり、1本のみ対象にされていることから城内でも貴重な樹木であったと考えられる。さらに明和4年(1767)の『式万石御上地二付日新書留帳』では、二ノ丸内で2119本、三ノ丸土塁で2385本の樹木が払下げられている。その内二ノ丸内には漆が703本含まれている。また幕府代官が取り払った家中屋敷の栗やクルミ、柿や漆木を入札の対象外としたことが記されている。秋元氏の家臣であった山瀬遊圃が明和年間に記した『山形雑記』には二ノ丸の土塁上に生育する大木のスギが鶯や鷹といった猛禽類の格好の住処となっていたこと、城

内の中仕切門付近に目通りで四、五人抱えるほどの城内外で一番の古木である「小金杉」があったことが記されている。これらスギの大木には最上公が御植えになったという伝承が加えられており、最上義光の居城した近世初頭から二ノ丸内にはスギが林立する植生景観が継続して維持されていたことも考えられる。また『山形雑記』にも二ノ丸内の荒地の日当りの良い場所には漆の木が植えられていることが記されている。近世の山形城下町の様子を描いた安藤廉重の「湯殿山道中略図」や文政3年(1820)の発行とされる宇野義川による「湯殿山道中一覽」(七日町大手前)といった画像史料からも当時の二ノ丸を取り囲むスギと推定される針葉樹の大木が林立する景観を読み取ることができる(図5・6)。

近代初頭の記録に大木として記録されている樹木についても、近世から城内に生育していた可能性が極めて高いものである。明治初期に城内の建物が破却される以前の山形城を撮影した唯一の資料である菊池新学撮影の古写真には、二ノ丸東大手門付近に針葉樹に加えて、北櫓の屋根を超えるほどの広葉樹の大木が存在していたことを確認できる(図8)。近世の山形城二ノ丸内に生育していた可能性が極めて高い広葉樹は、エノキ・エゾエノキ、サクラ、サイカチなどである。『やまがた郷土随筆』に収録された水野藩士族の老女の残した伝承によれば、鉄道路線が設けられる以前の東大手門前の南角には根元から霊泉の湧き出るサイカチの大木があったという。これらは「血染めの桜」など近代まで残ったものもあるが、明治初期の払下げによって大半は伐採されてしまった。また『明治4年士族長日記』によれば、二ノ丸内に生育していたスギの大木が落とす杉葉を市民が城内に立ち入って拾っていたことが記されており、おそらく焚き付けの燃料として使われたと考えられる。

三ノ丸土塁の植生景観について、『年寄部屋日記書抜』には三ノ丸土塁上に生育する「竹木」や「杉」の存在が記されている。『式万石御上地二付日新書留帳』や『古今夢物語』の記述からも三ノ丸土塁上に樹木が生育していたことを確認できるが、『古今夢物語』では町民の請願により、二・三ノ丸土塁上の樹木の伐採を止めたとしており、城下町でも土塁上の樹木が町民にとって何らかの意味を持って保全されていたことが考えられる。文政3年(1820)の「湯殿山道中一覽」(十日町)からは十日町付近の三ノ丸の土塁上に樹木が密集して生育していた様子を読み取ることができるが、ここに描かれた樹木は丸みを帯びた樹形や枝ぶりの表

現から針葉樹とは区別された広葉樹とみなすこともできる(図7)。近代初頭の史料として、『事林日記』明治3年(1870)の「城外郭土居の樹木払下の達」には三ノ丸の小橋口から西回りに十日町口まで三ノ丸土塁上の樹木を払い下げたことが記されている。さらに『明治六年山形県区長日記』では三ノ丸土塁に生えている雑木及び漆の老木を払い下げるとしており、追記として元来は当地に雑木の老朽木が多かったと記されている。別の箇所には入札された外郭土居上の雑木の大きさごとの本数も明記されており、目通り幹周囲が約660~600cmのものが4本、約570~300cmのものが108本、約270~30cmのものが2118本、総計2230本の雑木が三ノ丸土塁上に生育していたことを確認できる。雑木に該当する樹種について、明治13年(1880)の「山形御城三ノ丸内土居敷に生立雑木払下之義伺」が参考として挙げられる。ここでは三ノ丸の土塁上に生育するケヤキ1本、エノキ14本、ケンボナシ1本が払下げの対象になっている。各樹木の目通りの幹周に注目すると、目通り幹周180cm以上の大木が11本ある。また『事林日記』明治4年(1871)の「外廓の槻伐木に付、枝葉払下の達」にも三ノ丸土塁上で伐採した「槻」の枝葉を払い下げたことが記されている。これらの資料から雑木にはケヤキ、エノキ、ケンボナシが含まれていたことが判明する。その他にもサイカチやサクラが雑木に含まれていたことも充分に考えられる。以上の『明治六年山形県区長日記』や「山形御城三ノ丸内土居敷に生立雑木払下之義伺」の記述から近代初頭の三ノ丸土塁にはケヤキやエノキの広葉樹が主体を成す植生景観が形成されており、ここで大木として記録された樹木は近世から土塁上に生育していたことが考えられる。

近世における山形城内の植生景観について、二ノ丸内にはスギの大木が林立しており、漆やサクラを始めとした広葉樹を交える景観が形成されていた。また三ノ丸内にはスギやモミといった針葉樹に加えて、柿や栗、漆といった有用樹木、サイカチやケヤキの広葉樹の大木が生育しており、三ノ丸土塁上には雑木として記録されたケヤキやエノキを始めとする広葉樹の老木が多くみられ、竹やスギを交える植生景観が形成されていた。

3-3. 近代の植生景観

近代初頭以降、城内は明治29年(1896)に歩兵第三十二連隊の設置に伴い国に寄与されるまで、農耕地や薪伐地とし

て利用され、城内の建築物の解体とともに樹木も激しい攪乱を受けている。『事林日記』及び『明治5年戸長局日記』では、明治5年に本丸及び二の丸の土地・建物・樹木・石垣・兵器等の払下げが布達されている。この段階で近世の山形城内の植生景観を形成していた樹木の大半が払下げの対象として伐採されている。本節では明治29年頃に軍隊が編成・駐屯した後の山形城跡、おもに二ノ丸土塁上における植生景観について、僅かな文献史料と絵葉書に載せられた古写真をもとに確認していく。

文献史料にみられる記録として、明治34年(1901)の『花の山形名勝記』には「古松・老樅」の記述があり、二ノ丸土塁上に老木の大木のマツ類やモミが並び立っていたことが記されている。大正5年(1916)の『山形市誌』には二ノ丸土塁上に「老杉」が茂り、城内には古桜樹である「血染めの桜」(図14)のあったことが記されている。

絵葉書に掲載された多くの古写真からは中央の広場や兵舎を取り囲むように二ノ丸土塁一帯にスギの大木が林立する景観を確認することができる(図9・10)。また数枚の古写真からはスギを主体とする植生に広葉樹の大木を数本交えていたことがわかる(図11・12)。サイカチについては、石鹸の代用とされる実を洗濯の授業の一環で採取したことや霞城連隊の兵隊が洗濯に使用したという伝承が残されている。その他、城内にはサクラが多くみられるが、明治39年(1906)に日露戦争に出征した将兵によって凱旋記念の染井吉野の苗木1千本が植樹されており、サクラは当時の景観を構成する主要な樹種の一つであった(図13)。このサクラは現在も霞城公園二ノ丸土塁上に大木となって生息している。

軍隊が駐屯した後の山形城跡の植生景観について、二ノ丸土塁上には近世から継続して多数のスギの大木が林立し、その間にエノキやサイカチを始めとする広葉樹の大木が数本生育していた。城内に多数生育していたサクラは日露戦争後に植樹された染井吉野に加えて、「血染めの桜」のような近世から生育していた老木もあった。これら近代の植生景観を形成していたスギの大木は戦時下で伐採されてしまうが、サイカチやエノキの大木は戦後も残り、現在も巨木として二ノ丸土塁上に生育している様子を見ることができる。

4. 現状の植生景観にみられる歴史性

霞城公園二ノ丸土塁及び十日町三ノ丸土塁跡における現状の植生景観について、前節で確認した近世から近代までの植生景観の変遷を踏まえて、その歴史的な価値づけ及び位置づけを行いたい。霞城公園二ノ丸土塁については、とりわけ樹種構成や景観の様相に差異が認められる土塁の南及び南西側にあたる南側エリアと北及び北東側にあたる北側エリアを検討の対象としたい。

霞城公園二ノ丸土塁について、南側エリアではサクラ・ケヤキ・エノキといった広葉樹が主体となって植生景観を形成している。とりわけ二ノ丸土塁上でもケヤキが集中して分布しており、北側エリアに多くみられるスギは生育していない。現時点で近世から近代までの期間にケヤキとエノキが二ノ丸内に生育していたことを文献史料から確認できていない。また近代の古写真には南側エリアにもスギの大木が林立していた様子を確認できることから、広葉樹が主体を成す現在の植生景観は近世から近代の間にはみられず、戦後になって形成された新しいものであると考えられる。

ケヤキが多く生育する南側エリアに対して、北側エリアではスギの大木が集中して生育しており、近世から城内に生育していた可能性のあるエノキやサイカチの巨木を交える植生景観が形成されている。スギは近世から近代までの二ノ丸内の植生景観を代表する樹種であり、現在北側エリアに生育している多くのスギも近代に伐採を免れたものが成長したものであろう。エノキやサイカチの巨木も往時は南側エリアにも数本みられたと推定されるが、大半は伐採されてしまい、現在残るのは南東隅のエノキのみである。サイカチは近世から巨木として山形城内の至る所に生育していた樹木であり、城下町に暮らす人々の生活や信仰と結びついていた。これら北側エリアの植生景観は近世から近代までの二ノ丸土塁の植生との連続性がみられる景観として捉えることができる。

十日町三ノ丸土塁跡にみられる植生景観について、樹種の構成はケヤキをはじめとしてエノキやスギを交えており、文献史料からも近世から近代の期間にそれらの樹種が三ノ丸土塁上に生育していたことを確認することができる。よって近代初頭の三ノ丸土塁の解体とともに大部分は伐採され消滅してしまった往時の植生景観の様相をかりうじて残していると言える。

以上のことから、霞城公園二ノ丸土塁及び十日町三ノ丸土塁跡における現状の植生景観には近世から近代までの山形城内の景観につながる歴史的な価値を見出すことができる。とりわけ二ノ丸土塁北側エリアに多く生育しているスギや十日町三ノ丸土塁跡に生育しているケヤキやエノキについては、既存の保存管理計画では歴史的な観点からは言及されていないが、往時の植生景観との連続性が認められるものであり、史跡整備においても歴史的な価値を備えた構成要素として適切な保存管理が行われていく必要がある。また戦後に新しく形成された二ノ丸土塁南側エリアの植生景観についても、それらがケヤキやエノキといった山形城と所縁の深い樹種によって構成されていることを考慮した保存管理が行われるべきである。その他、モミヤマツ類、クルミといった近世から近代までの山形城内の植生景観を記した文献史料に登場する樹種なども保存管理計画において歴史的な観点から何らかの価値づけ及び位置づけを行うことが必要である。

5. おわりに

本稿では史跡山形城跡の植生景観について、近世から近代までの城内の植生を文献史料及び画像史料から確認し、そこで得られた知見を踏まえた上で、現状の植生景観の歴史的な価値づけ及び位置づけを行った。本稿では文献史料と画像史料を中心に往時の植生景観の復元を行ったが、その他の方法として遺跡の発掘調査によって出土した自然遺物からも過去の城内における植生を知ることができる。例として、2021年度に東北芸術工科大学歴史遺産学科が発掘調査を行った調査区からは、木製品とともにスギの枝葉やマツ類の球果といった自然遺物が良好な状態で出土している。この遺構は最上氏時代の堀跡であり、近世初頭頃の山形城内にスギやマツといった有用な針葉樹が生育していた可能性を示している。

史跡整備において樹木を城跡の重要な構成要素とみなすためには、それらが果たした役割や機能について認識しておく必要がある。城内に生育するスギやマツ、クリなどは城外から視界を遮る防備的な機能に加えて、建材や食料など様々な用途で利用されたことが推測される。しかし、近世に三ノ丸土塁上の樹木が城下町に果たした役割及び機能については明らかでない。今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿の作成にあたり、山形市公園緑地課には資料の提供を、郷土史家の市村幸夫氏には文献史料の翻刻及び山形の漆に関する助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

〈参考文献一覧〉

- 『山形市史 中巻 近世編』1971 山形市市史編さん委員会、山形市市史編集委員会 編
- 『山形市史 下巻 近代篇』1975 山形市市史編さん委員会、山形市市史編集委員会 編
- 『霞城公園整備計画書』1984 山形市
- 『山形城跡保存管理計画』2012 山形市教育委員会
- 『史跡仙台城跡保存活用計画』2019 仙台市教育委員会
- 『国指定史跡棚倉城跡保存活用計画書』2021 棚倉町教育委員会
- 吉田ゆり子2014「幻の木々を求めて一城絵図を読み解く一」『画像史料論』吉田ゆり子他編東京外国語大学出版会
- 吉田ゆり子2018「日本の都市と樹木 城の城下町の近世から近代へ」『「明治一五〇年」で考える一近代以降期の社会と空間』ダニエル・V・ボツマン, 塚田孝, 吉田伸之編 山川出版社
- 内田和伸2020「史跡等保存活用計画における留意すべき構成要素について」『史跡等の保存活用計画一歴史の重層性と価値の多様性一』奈良文化財研究所
- 『年寄部屋日記書抜一山形堀田藩 自元禄十三年～至延享三年一』2021年寄部屋日記刊行会
- 『出羽国旧事略記』『山形市史編集資料 第31号』1973 山形市史編集委員会
- 『式万石御上地二付日新書留帳』『山形市史編集資料 第45号』1976 山形市史編集委員会
- 『山形雑記』『山形市史編集資料 第64号』1982 山形市
- 『図説 山形県史』山形県史 別編 第一巻 1988 山形県
- 『義川筆「湯殿山道中一覽」版画(抄)』1991 山形郷土史研究協議会
- 『写真アルバム 山形市の120年』2009 大久保義彦監修 いき出版
- 『やまがた郷土随筆』後藤嘉一著作集 第二巻 1978 山形県民芸協会
- 『明治4年士族長日記』『山形市史編集資料 第24号』1971 山形市史編集委員会
- 『古今夢物語』『山形市史編集資料 第70号』1986 山形市
- 『事林日記 下 山形市史 史料編 3』1971 山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会 編
- 『明治六年山形県区長日記(1月～6月)』『山形市史編集資料 第25号』1971 山形市史編集委員会
- 『第2より山形旧城三の丸内生立つ雑木払下何』JACAR(アジア歴

史資料センター)Ref.C04029552200、明治13年「大日記 砲工の部 2月
木坤 陸軍省総務局」(防衛省防衛研究所) なお本稿では件名を「山形
御城三ノ丸内土居敷に生立雑木払下之義伺」として扱っている。

23.『明治5年戸長局日記』『山形市史編集資料 第24号』1971 山形市史
編集委員会

24.『花の山形名勝記』『山形市史編集資料 第66号』1983 山形市

25.『山形市誌』『山形市史編集資料 第66号』1983 山形市

26.『村山民俗学会 会報合本復刻版第2集』2011 村山民俗学会

27.『ふるさとの思い出写真集 明治大正昭和 山形』1979国書刊行会

〈挿図出典〉

図1・2・3:筆者撮影 図4:「霞城公園二ノ丸土塁整備に伴う樹木位置
等測量委託」の成果物をもとに筆者作成、調査は2022年6月から7
月にかけて実施

図5:文献14 図6・7:文献15 図8:文献16

図9・10:文献27

図11・12・13・14:筆者所蔵の絵葉書より

表1 近世から近代の文献史料にみる山形城内における植生の記録

番号	史料名	年号	記載樹種	場所	植生に関する記録
1	『年寄部屋日記書抜』(1)	正徳2年 (1712)	竹	三ノ丸土塁	「土手附之屋敷大手之上」にある竹木の伐採を禁止。
2	『年寄部屋日記書抜』(2)	享保16年 (1731)	サイカチ	三ノ丸内	「生嶋市之進屋敷裏東ノ方野畑之内」にあるサイカチの枝を伐採。
3	『年寄部屋日記書抜』(3)	元文5年 (1740)	スギ	三ノ丸土塁	稲荷口付近の「土手之上」にて杉の枝を取る者有り。
4	『出羽国旧事略記』	明和3年 (1766)	スギ、モミ、マツ、漆、栗、ケヤキ、その他	三ノ丸内	城内の開発に伴い三ノ丸内の樹木を入札対象物とする。樹木の数量も記載。
5	『古今夢物語』	明和3年 (1766)	スギ、モミ、マツ、漆、栗、ケヤキ、その他	二ノ丸土塁 三ノ丸内 三ノ丸土塁	内容は「出羽国旧事略記」とほぼ同じだが、二ノ丸・三ノ丸の土塁上の樹木は「町在下々」の講願があったため、伐採せずに残したとある。
6	『貳万石御上地二付日新書留帳』	明和4年 (1767)	栗、胡桃、柿、梅、漆	二ノ丸内 三ノ丸土塁 三ノ丸内	「二ノ丸・三ノ丸手廻り」の樹木4504本を払下げのため入札対象物とする。また城内の「家中屋敷」を田地にする際、栗・胡桃・柿・梅・漆は伐採せずに残したとある。なお「三ノ丸手廻り」の樹木は払下げなかったとある。
7	『山形雑記』	明和年間	スギ、雑木、漆	二ノ丸土塁 二ノ丸内	「土居廻り」を取り囲む「最上公御植立の大木之杉」は鶯・熊・鷹などの住処であった。二ノ丸内は「雑木大小草敷」とある。「中仕切御門黒堀内右之方」には城内外で隋一の古木である「小金杉」が有り。荒れ地の日当りの良い場所には漆が植えられていた。
8	「城外郭土居の樹木払下の達」『事林日記』	明治3年 (1870)	樹木	三ノ丸土塁	小橋口から十日町口まで「外郭土居上之樹木」を入札対象物とする。
9	「外廓の槻伐木に付、枝葉払下の達」『事林日記』	明治4年 (1871)	ケヤキ	三ノ丸土塁	「外廓土居上」に有る「槻」を伐採した際、枝葉を払下げとする。
10	『明治4年土族長日記』	明治4年 (1871)	スギ	二ノ丸内	スギの葉を拾い等に城内に入る者有り。
11	『明治六年山形県区長日記 (1月～6月)』	明治6年 (1873)	雑木、漆	三ノ丸土塁	「外廻り土居上」に有る雑木、漆老木、櫓台の石垣を入札対象物とする。元来雑木は老朽木が多く、望む人も無かったとある。内訳は雑木2230本、漆老木491本。
12	「山形御城三ノ丸内土居敷に生立雑木払下之義同」	明治13年 (1880)	ケヤキ、エノキ、ケンボナシ	三ノ丸土塁	「三ノ丸内土居敷」に生える雑木15本を払下げる。樹種別の内訳は「槻」1本、「榎」13本、「枳根」1本である。目通りの幹周囲も記載。
13	『花の山形名勝記』	明治34年 (1901)	マツ、モミ	二ノ丸土塁	「古松・老樅」が土塁上に並び立つ。
14	『山形市誌』	大正5年 (1916)	スギ、サクラ	二ノ丸土塁	「老杉」が土塁上に立つ。城内に「血染めの桜」有り。

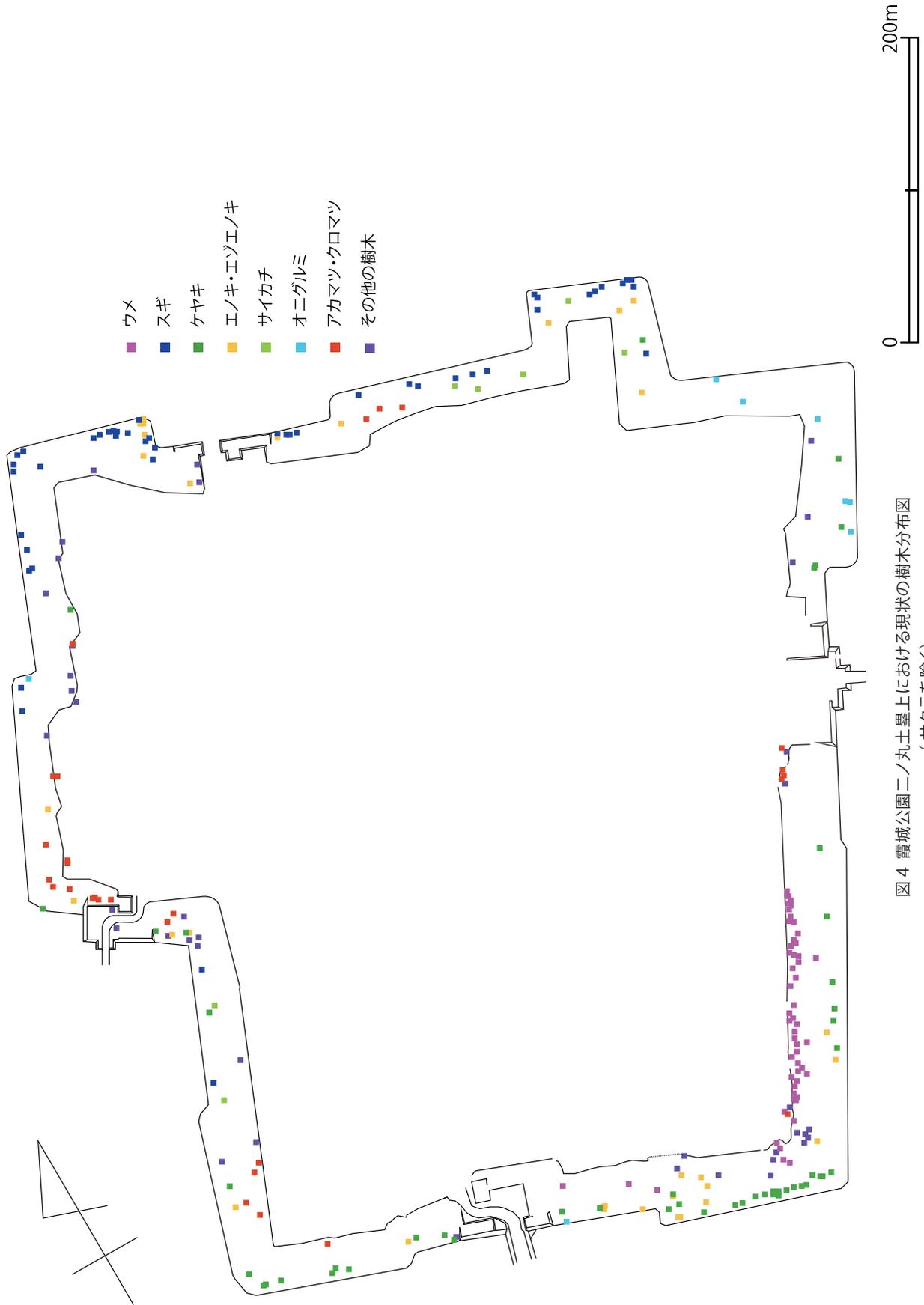


図4 霞城公園二ノ丸土塁上における現状の樹木の分布図
(サクラを除く)

近世及び近代初頭の画像史料

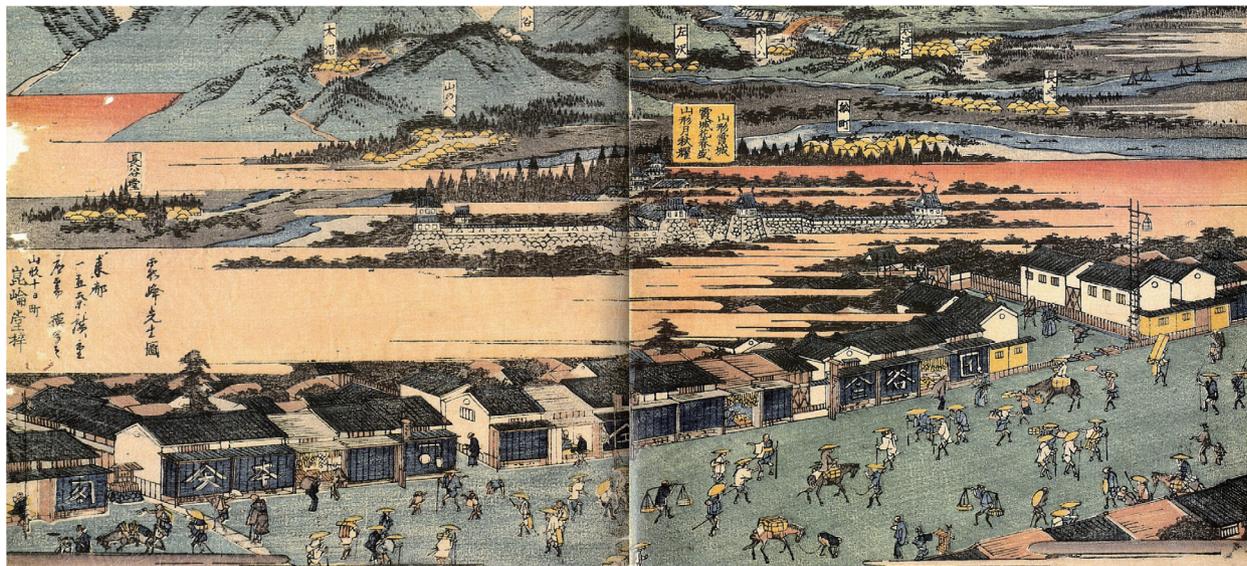


図5 湯殿山道中略図

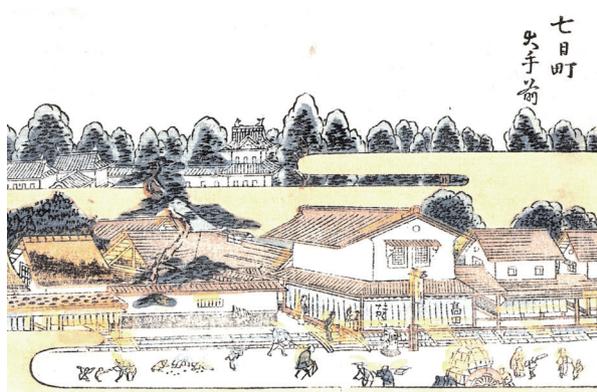


図6 湯殿山道中一覽(七日町大手前)



図7 湯殿山道中一覽(十日町)

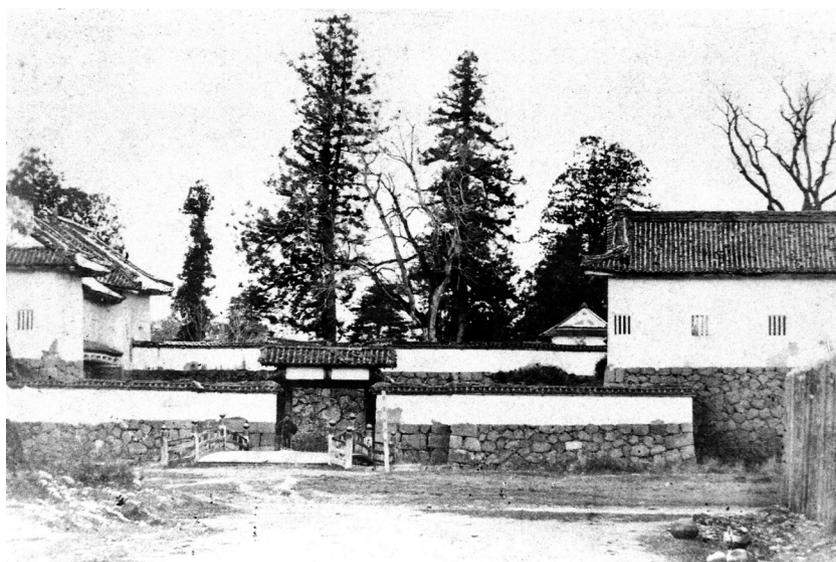


図8 山形城二ノ丸東大手門(菊池新学撮影)

近代の古写真から



図9 ニノ丸土塁上のスギ(南門から)

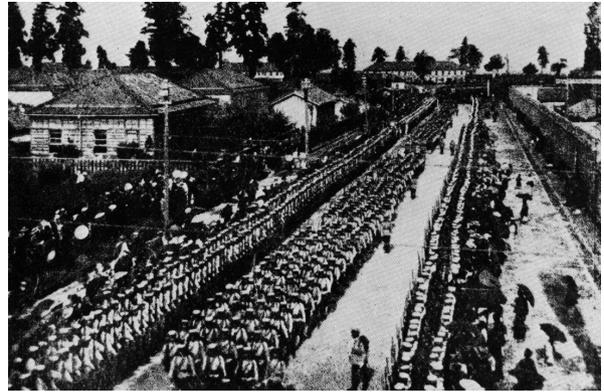


図10 ニノ丸土塁上のスギ(宮門から)



図11 ニノ丸土塁上の広葉樹(1)
(行軍路野山) (店擬摸るけ於に聞廳所會集校將) 祭旗軍隊聯二十三第兵歩



図12 ニノ丸土塁上の広葉樹(2)
(行軍路野山) 況實の行飛轉道スミヌ人鳥 (郷兵練南城形山於)



図13 城内のサクラ
近 附 所 兵 衛 【 隊 聯 二 十 三 第 兵 歩 】

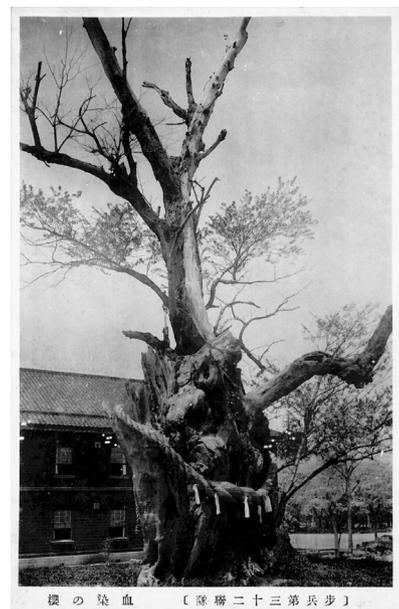


図14 「血染めの桜」
櫻 の 染 血 【 隊 聯 二 十 三 第 兵 歩 】